

山葉寅楠の起業と英学的背景

— 医師・福島豊策、太田用成との関わりを巡って —

小粥章司¹⁾ 小野澤 隆²⁾

1) 浜松史蹟調査顕彰会 2) 心身マネジメント学科

Yamaha Torakusu's Entrepreneurship and His Background of Anglo-American Influences

— Regarding Relations with Physicians such as Fukushima Housaku and Ohta Yousei —

Shoji OGAI, Takashi ONOZAWA

要 旨

山葉寅楠は世界的な総合楽器メーカー・ヤマハの創業者として知られているが、その起業に至る経緯については不明な点が多い。本稿では、山葉寅楠の出生地とルーツの問題、長崎遊学と福島豊策との出会い、創業の地である浜松に至るまでの経緯、さらには山葉寅楠への英学の影響について検討する。特に、明治初期の英学の黎明期において、山葉寅楠のオルガン作りを支援した医師の福島豊策、太田用成らとの関わりを検証するとともに、医師、地元資本家、キリスト教の教会および信者らによる支援について考察し、東海道の一地方都市に過ぎなかった浜松に世界的楽器メーカーが誕生した背景を探った。
キーワード：山葉寅楠、福島豊策、太田用成、英学

Abstract

Yamaha Torakusu is the famous founder of the world-wide known "Yamaha Instruments". However, there are many unknown aspects of his founding of Yamaha. This paper will discuss issues of his life such as birthplace, his roots, his study in Nagasaki, encounter with Fukushima Hosaku. Also to be discussed are his founding of the company in Hamamatsu and Anglo-American inspirations. The main focus of this paper is the influences of Drs. Fukushima Hosaku and Ohta Yousei, also with support of local industrialists, Christian churches and believers which led to the birth of Yamaha in the provincial city of Hamamatsu along the Tokai Road.

Keywords : Yamaha Torakusu, Fukusima Housaku, Ohta Yousei, Ango-American Studies

I. はじめに

楽器メーカー・ヤマハ（旧・山葉風琴製造所、山葉楽器製造所、日本楽器製造株式会社、現・ヤマハ株式会社、以下日本楽器またはヤマハ）の創業者・山葉寅楠^(注1)については、すでに同社発行の『山葉寅楠翁』『社史』を始め、多くの本や論文に書かれており、半ば伝説化しているものもある。しかし、その出自や出生地、人物像、人間関係、行動などについては不明な点が多く、極めて謎の多い人物でもある。

例えば、初期における主要商品であるオルガン（リードオルガン）の製造開始時期は公式には昭和52年（1977）刊行の『社史』で明治20年（1887）とされているが、実際にはそれよりもかなり早く、明治17、8年頃から試作が始まっていたようである。また製品の審査を受けるために寅楠らがオルガンを天秤棒で担ぎ、浜松から徒歩で東海道を東進し、箱根峠を越えて東京まで運んだという「伝説」については、近くの港からの船便を利用したのではないかとの疑問もある。そのほか山葉寅楠の名前や山葉家の出自の問題、キリスト教との関係などいくつかの疑問点を再検討すると共に、山葉オルガンの創業に深く関わった人物についても文献調査をおこなった。

その結果、オルガンの「東海道・箱根越え」伝説については、送り状や写真などの客観的証拠はないが、当時すでに開業して約10年になる「東海道乗合馬車」を利用して東海道を走り、脚夫や馬によって箱根峠を越えていた可能性が高いことが史料的に明らかになった。（『内国通運会社と郵便馬車』）

さらに、山葉家の祖先はルーツが今の佐賀県・長崎県にあたる肥前にあり、1667年頃までに肥前から和歌山に移ってきた荻六郎兵衛という武士であったことを和歌山県所蔵の史料で確認することができた（『紀州家中系譜並に親類書書上げ（下）』）ほか、寅楠自身の出身地は紀州和歌山とされているが、関係資料を比較検討した結果、実際の出生地は江戸の紀州藩邸（紀州藩江戸屋敷）であった可能性が高いことがわかった。（『山葉寅楠翁』ほか）

武士であった寅楠が、戊辰戦争での敗走後、大阪でいかにして立ち直り、長崎で西洋技術の粋である時計技術を身につけ、大阪で医療機械技術を学んだのか、実に興味深いことではあるが、当人の回顧談も関係者の証言もないため具体的なことは一切不明である。しかし、浜松において楽器産業が成立するに至る経緯については、関係者の断片的情報をつなぎ合わせることによって、その一端が浮かび上がってきた。

また本稿は、山葉寅楠が山葉オルガンの創業において深く関わった医師の福島豊策^(注2)や太田用成^(注3)から受けた英学的な影響についての考察でもある。この視点は寅楠の経歴の中で見過ごされてきたとあってよい。福島は太田の後任として浜松医学校校長兼浜松病院院長を

務め、太田は浜松医学校校長兼浜松病院院長時代に医学書『七科約説』を翻訳・出版し、明治初期の浜松の英学で特筆すべき足跡を残した。起業家である寅楠と、片や医師である福島と太田とは、一見するとそれぞれ畑の違う世界に属するかのようであるが、寅楠は山葉オルガンを創業する過程で、近代医学を修めた福島と太田から医療・技術・芸術といった英学的な接点をとおして多大な影響を受けていたと考えられる。

II. 山葉寅楠のルーツと出生地秘話

まず山葉寅楠本人の出自とそのルーツを調べてみた。山葉寅楠の旧姓は山羽^{やまぼ}といい、出身地和歌山の県立文書館に収められている『紀州家中系譜並に親類書書上げ（下）』の「山羽家系譜并親類書」（以下『山羽家系譜』）に寅楠の7代前まで詳しく書かれている。それによれば山羽家の元祖^{おき}は荻六郎兵衛という武士で、肥前（今の佐賀県・長崎県）に生れ、代々鍋島家に仕えていたという。鍋島家は佐賀、蓮池、小城、鹿島の4藩を支配し、近世には長崎警備も担当していた有力大名である。荻六郎兵衛は、理由は不明だが和歌山に移り住み、寛文7年（1667年）に紀州藩士に取り立てられたが、脱藩した武士が他の藩に取り立てられたのは、何らかの特別な技術や知識を持っていたのであろう。山羽姓に変わったのはその頃のことと思われるが、元祖として荻六郎兵衛の名が藩の公的な系譜に書き加えられたのは寅楠の父が家督を相続したときのことであり、それまでは慎重に伏せられていたのである。山羽家のルーツが肥前にあったということは、寅楠が明治時代になってから変えた「山葉」の「葉」の字は、鍋島家ゆかりの武士道精神である「葉隠」から取られ、「和歌山の葉隠」という意味が込められていたのであろうか。

次に寅楠の出生地を参考文献で調べると、江戸の紀州藩邸（紀州徳川家江戸屋敷）と紀州和歌山に分かれていることがわかる。藩邸とは本国の飛地のようなところであり、外国の大使館或は租界のようなところともいえる。紀州藩のように有力な藩は複数の広大な屋敷を構えており、その最大規模の赤坂邸（現・東宮御所など）は約14.5万坪の広大な敷地を有していた。そこでは常時数千人の藩士やその家族、使用人らが生活し、藩主の江戸参府に備えていたため、そこで生まれた紀州人も多かったのである。

ではなぜ寅楠の出生地が二つの説に分かれてしまったのだろうか？最も古い寅楠の評伝『岳陽名士伝』（1891）には「君ハ紀州和歌山の人」と書かれているだけで出生地は判断できないが、「紀州藩邸」の言葉も使われていない。次に古い1911年の『現代発明家伝』には「其の生れは和歌山県」と書かれ、1913年の『大日本人物誌』には「紀州有田郡に生まる」とより具体的に書かれている。和歌山市ではなく有田郡と書かれているのは、当時

実家を継いだ兄の家が有田郡北湊村（現有田市港町）にあったことによると思われる。1916年の『静岡県紳士録』には「紀州和歌山に生る」と書かれ、1916年に寅楠が亡くなったあとも、1926年発行の『浜松市史 全』には「和歌山県出身」と書かれている。ところが1929年に日本楽器が公式に刊行した『山葉寅楠翁』が「紀州藩邸に生まる」と書くと、1935年発行の『我等が郷土 6 山葉寅楠』と1936年の『日本発明家伝』もそれを踏襲して「紀州藩邸出生説」をとるようになったのである。

つまり、寅楠の生前は「和歌山出生説」のみであり、没後13年もたってから「紀州藩邸出生説」が出てきたことになる。これはどういうことだろうか。そもそも自分の出生地は自分ではわからないのが普通で、誰かに教えられて初めて自覚するものである。生前、寅楠自身が「和歌山の生まれ」と思っていた可能性はあるが、没後になって「紀州藩邸出生説」が出てきたのは、当時まだ社内に多数在籍していた寅楠の子や甥・姪などの親族、関係者からの証言が十分に聞けたためではないだろうか。

しかし1944年、日本楽器三代目社長の川上嘉市（1885-1964）による評伝「山葉寅楠翁と楽器の製造」の中で、寅楠は「和歌山に生まれた」（川上嘉市 1944 p.34）と書かれ、突如として再び「和歌山出生説」が出てきたのである。その影響からか、1962年の『遠州偉人伝』、1972年の『伝記小説 山葉寅楠』などが一様に「和歌山出生説」を採用し、さらに1977年出版の『社史』も「創立者・山葉寅楠紀州に生まれる」（同書 p.1 の年表）と書き「和歌山出生説」は大いに広まったのである。しかしこれらはみな「和歌山出生」の根拠を示しておらず、特に川上による評伝は他のほとんどの文献に出てくる寅楠の「長崎滞在」（明治4～9年）にも触れていないため、その伝記としての信頼性には疑問符をつけざるを得ない。

一方、ヤマハ研究で著名な大野木吉兵衛（1922-2000）の「浜松における洋楽器産業」（1977）などの諸論文はすべて「紀州藩邸出生説」で一貫しており、それ以降に出た別の著者による『ピアノの誕生』（1995）、『図説・明治の群像』（2003）、『明治大正人物事典』（2011）などにも「江戸説」が採用されているが、確実な証拠はないため、寅楠の出生地が未確定の状況はいまだ継続しているといえる。しかし、親族らの証言をもとに日本楽器が正式に刊行した『山葉寅楠翁』の説明と、戦後、大野木が研究者の立場から行った親族や関係者からの聞き取りによる結論は「紀州藩邸出生説」で一致しており、重視されるべきであろう。

出生地の問題は教育環境の問題としてとらえることが重要である。仮に寅楠が鳥羽・伏見の戦いに参戦する十代半ばまで、或いは17歳で大坂に出奔して時計商の徒弟となるまで江戸の紀州藩邸で暮らしていたとすれば、幕末の蕃書調所（1857年設立）など英学を中心とした学問・調査機関が林立し始めた環境の中で、英学の空気に触れる機会が十分にあったと推測することができよう。

Ⅲ. 医師・福島豊策、太田用成との出会い

1. 肥前・長崎遊学から浜松へ

幕末の紀州徳川藩の武士として育った山葉寅楠に対して、文化的に大きな影響を与えたのは、時計技術習得のために滞在した長崎での生活であろう。西洋文化が日本で最初に花開いた肥前・長崎で、明治4年から9年にかけての5年間を過ごしたこと自体、海外留学にも匹敵する貴重な原体験であり、単に時計製造技術の習得に止まらず、音楽を含む多様な西洋文明を肌で直接感じていたに違いなく、長崎滞在中の明治6年に解禁されたばかりのキリスト教の教会に流れるオルガンの音も聞いていたはずである。

また肥前といえば、寅楠の起業を支援したとされる浜松病院院長の医師・福島豊策（1838-1903）の出身地も肥前である。福島は肥前小城藩（現・佐賀県小城市）出身で、苦学して長崎医学校で学んだ人物である。更に、いくつかの文献（大野木 1977 p.298 ほか）では、明治4年に長崎に来た寅楠とほぼ入れ違いに長崎医学校を卒業し、各地の病院の院長を歴任したとされている。しかし、明治24年発行の静岡県人の紳士録『岳陽名士伝』には、福島は「塾僕となり傍ら学科を修め、後ち薬局係となり遂に当直医となる。明治七年山梨県山梨病院長心得に聘せられる。同九年新潟県新潟病院副長となり高田病院に派遣せられ之か長となる。後、兵庫県に転じ、兵庫病院副院長となり淡路国洲本病院に派遣せられ、之か長となる。同十二年静岡県浜松病院長となり」（同書 pp.101-102）と書かれており、山梨病院へ赴任する明治7年までは長崎にいたことになる。

そのことを裏付ける史料としては、長崎医学校の在籍者名簿があり、明治4年3月時点の在学を確認することができる（名簿上は福島豊作）。当時の校長は後に内務省衛生局長を長く務めることになる明治医学界の実力者長與専齋（1838-1902）である。（『長崎医学百年史』 p.211）福島がその直後に医学校を卒業し、病院の薬局係（薬剤師）、当直医として明治7年まで長崎にいたとすれば、両者の長崎滞在は3年ほど重なっていることになる。また福島はすでに長崎で医師として様々な社会的啓蒙活動を行っていたので、当時人口3万人ほどの狭い港町の長崎で寅楠と何らかの交流があった可能性は高い。

もし寅楠と福島が長崎ですでに知り合っていたとすれば、長崎で医師として活動していた福島が、時計技術者である寅楠に医療機械修理業への転身を勧めるのはごく自然な流れであろう。また、福島の師である大庭雪齋（1805-73）や長與専齋は、当時大坂の医学・蘭学の中心であった緒方洪庵（1810-63）の適塾（1838年開設）で学んでいるので、医師や科学者の人脈を生かして適塾の流れを汲む大阪の病院や医療器械店に寅楠を紹介することもできたと思われる。長與専齋は明治6年3月に約1年半の欧米視察から帰国し、文部省医務局長（後に機

構改革により内務省衛生局長)や兼任で東京医学校校長に就任しているのが、長與の構想した医師・医学者の全国的配置計画に福島豊策が組み込まれていたのではないだろうか。福島が各地の病院を頻りに移動しているのはそのためであろう。

さらに福島豊策の浜松病院への赴任は、浜松病院院長の太田用成(1844-1912)、医局員兼教員の虎岩武(1856-1894)、柴田邵平(1825-1898)らによって明治11~12年に浜松で翻訳出版された医学書『七科約説』がきっかけになった可能性がある。『七科約説』はアメリカのヘンリー・ハーツホーンが著わした医学全書『A Conspectus of the Medical Sciences』第二版(1874年刊)の全訳本で、上下二冊、総ページ数約2000ページの大冊である。初版として上編1800冊、下編1000冊、計約2800冊が浜松の開明堂で印刷され、東京の丸善などから販売されたが、当時の医学校の教科書あるいは医師試験の参考書として広く歓迎されたという。(『東海と伊那』p.443)この本には明治12年に上編が再版された際、内務省衛生局長の長與専齋が推薦の序文を寄せており、この時知遇を得た太田が後任院長の候補者推薦を長與に依頼した結果、長崎医学校時代の愛弟子で同僚でもあった福島豊策が推薦されてきたのではないだろうか。長與衛生局長はその後、明治14年に静岡県を視察に訪れ、太田、虎岩、福島ら県内の医療衛生関係者らと記念写真に納まっている。(『静岡県医療衛生史』p.20)

なお、虎岩武と柴田邵平は、『七科約説』を翻訳した後、愛知県公立医学校(名古屋大学医学部の前身)に移ったが、その時の同僚に、後に長與専齋の招きで内務省に移り、長與のあと衛生局長を務めた後藤新平(1857-1929)がいた。山葉寅楠は戦時下に農商務省の命を受け中国各地を視察した際(1905年)、台湾総督府勤務の後、特別な任務を帯びて満洲や韓国を視察していた後藤新平と出会って意気投合し、自宅にもしばしば呼ぶような関係になったという。「やがて寅楠を三井に接続してゆく同物産大連支店長箕輪焉三郎との邂逅はその貴重な附録であった」(大野木1966 p.66)とされているように、後藤の仲介によって、日本楽器と三井財閥の関係が深まったことがわかる。また後藤新平は後に満鉄(南満洲鉄道株式会社)の初代総裁を務めているが、日本楽器が満洲に大連支店(1908年開設)を始めとする支店網を作るきっかけとなったのは後藤からの要請によるという。(『ヤマハ100年史』p.16)

ところで、いくつかの文献では、寅楠は浜松に偶然派遣されてきたとされている。例えば、1929年の『山葉寅楠翁』には浜松病院院長の福島豊策が大阪の医療機械店に技量の優れた修理工の派遣を依頼したと書かれている。(同書p.2)ちなみに当時の医療機械とは今日のような電気式の機械ではなく、メスやハサミ、鉗子など医師の手先の延長としての器具を指している。また1962年の『遠州偉人伝』には大阪で「河内屋」という医療機械

店に住み込んで修理を覚え、各地の病院へ行って医療機械を修繕することを生業とし、浜松病院の福島院長が河内屋に技術者の派遣を依頼した結果、寅楠が選ばれて浜松へ派遣されてきたとも書かれている(同書p.26)。この河内屋という屋号は、後に山葉の西日本総代理店になる三木佐助の三木書店(三木楽器)の創業時の屋号も「河内屋佐助」といい、江戸時代の大坂では書店や薬種店などによく見られた屋号だが、医療機械店の河内屋の実在やそこでの在籍は確認されていない。

さらに寅楠は「明治12、3年より浜松に来る」(『浜松市史 全』1926 p.908)と書かれている文献もあるように、もし長崎ですでに福島豊策と出会っていれば、福島が赴任した明治12年以降、医療機械技師として頻りに浜松を訪れていても全く不思議ではない。共に肥前をルーツとし、文明開化の長崎で学んでいたことが、異郷の地である浜松においてオルガン作りに進展するきっかけになったのではないだろうか。

2. 浜松のキリスト教とオルガン

浜松病院院長兼浜松医学校校長の太田用成は『七科約説』を出版した後、明治12年(1879年)に県立掛川病院に院長として赴任し、その後、郷里の信州飯田で個人医院を開業したあと豊橋に移り、明治20年4月中旬から再び浜松病院の院長に就任するなど、いわゆる「三遠南信(東三河・遠州・南信州)地方」の各地を巡り活躍した人物である。(田崎哲郎2008 p.179)(正木敬二1978 p.448)また太田は熱心なギリシャ正教信者だったので、浜松の教会作りにも協力し、浜松の正教会が明治17年(1884)の春、浜松の田町に開設された際には太田夫妻の尽力があったという。(『浜松教会百年史』p.7)

この太田家には山葉オルガン創業前の寅楠についての言い伝えがあり、「寅楠は病院や太田の専属車夫をしていた」「寅楠は、敬虔なクリスチャンの太田家にあったオルガンに大変な好奇心を抱き、待ち時間には必ず触れていた。そのうち許可を得て内部の構造を見たり、分解するなど興味を持っていた」(『ヤマハ草創譜』p.13)「山葉寅楠氏は青年の頃、太田医院の医療機械を磨きに来ていたが、なかなか器用な人で、たまたま太田家にあった外国製のオルガンを解体し研究したのがきっかけになって楽器製作に乗り出すようになった」(稲留藤次郎1977 p.10)などという話が伝わっているという。

寅楠が太田家にあったオルガンに触れたのが太田院長の着任早々の頃であれば、ちょうど小学校のオルガン修理の時期とほぼ重なり、太田家のオルガンは小学校のオルガンと共に寅楠のオルガン製作にとって恰好の「お手本」になったはずである。太田の月給は初任給で50円、掛川病院長時代は75円と高給取りだったので、太田家に高価な輸入オルガンがあっても不思議ではない。ただし、ギリシャ正教会ではア・カペラ(無伴奏声楽)によ

る歌唱（合唱）が一般的であり、楽器は使わないので、オルガンは福島に頼まれて購入し、浜松へ持参したか取り寄せたのであろう。後任の福島豊策も、晩年に伝教系の社会教化団体「浜松信行社」（現・一般財団法人 浜松信行社）を組織しているように、宗教に関心が深く、キリスト教徒ではなかったがキリスト教信者とも深く交わり、「人の面倒をよく見た人で、山葉寅楠のオルガン創製にも一方ならず力を入れ、教育事業にも格別熱心」だったという。（『浜松教会百年史』p.6）

明治17年当時のメソジスト浜松教会の雰囲気伝えるエピソードとして、静岡教会の平岩愼保牧師が伝道応援のために浜松に来ると、平岩の定宿であった伝馬町の旅館花屋へ「識者を以て任ずる藤川春雄（浜松中学校教諭）、山口鉞三郎（浜松教会主事、後に浜松小学校校長）、福嶋豊策（浜松病院院長）、内田正（内田病院院長）、樋口林次郎（県会議員）、内田友治（印刷業）等錚々たる連中が押しかけて来て質疑、応答、論談風発、はては天地万有宇宙の真理の論議に及び、夜を徹して論じ合い、宿の迷惑一方ならず、世間これを評して耶蘇の梁山泊と評した」という話が伝わっている。（『浜松教会百年史』p.21）こうした自由闊達な雰囲気の中、面倒見がよく親切な福島は、当時浜松の教会にはまだオルガンがなかったことに気づき、教会用のオルガン作りを寅楠に依頼したのではないだろうか。

また浜松の政財界人とも交流し、浜松の産業事情を熟知していた福島は、浜松における楽器（特にオルガン）産業成立の可能性を確信していたのではないだろうか。すなわちリードオルガンの要は鍵盤とリード、ふいご、風箱などであり、寅楠の機械加工技術と地元の木材およびその加工技術があれば、あとは既製品のリードや鍵盤などを手に入れて組み立てればオルガンが作れると考えたのだろう。寅楠も当時1台45円もした輸入オルガンを、自分なら原価わずか3円でできると豪語するほど技術には自信を持っていたという。しかしこの当時、浜松に参考とすべきオルガンが1台もなかったとすれば、いくら技術が優れていても、音程や音色の正しい商品価値のあるものは作れなかったであろう。こうした中、浜松の小学校に本物のオルガン（普及型のベビーオルガン）が届き、しかもすぐに故障したことは、福島や寅楠らにとってはまさに千載一遇のチャンスだったのである。また同時期に豊橋から浜松に移転してきた太田用成浜松病院院長宅にもオルガン（おそらくストップ機構付きの高級品）があったとすれば、参考とすべき輸入オルガンが浜松に2台あったことになり、試作品の完成度を高めるのに大いに役立ったに違いない。また、試作品は当然浜松のキリスト教会で使われたと思われるが、そのことを示す資料や証言は今のところ見つかっていない。

晩年、浜松信行社の設立に尽力した福島の人物像について浜松信行社の元理事長平松実は、「何しろ福島さんは浜松一流の名士ですから、その顔で町の有力者の支持

を取り付け、いち早く基礎を据えることができたのです」とその感化力、指導力を高く評価している。（大野木 1972 p.102）よそ者であった寅楠は福島を全面的に信頼し、自分より数年早く浜松に来て、名医としてまた一流の知識人として人望のあった福島を通じて、浜松特有の産業事情を知り、地元政財界のネットワーク（人脈）に連なることによって楽器産業の基礎を築くことができたのである。

福島豊策については、山葉オルガン創業直前の明治20年7月頃の心境の変化がうかがえる新聞告知が残っている。それには、浜松病院退職後、当初は（故郷の佐賀への）帰省（引越）を計画していたが、友人らの奨めに従い浜松に居を定めることにしたことや医院の仮開業広告などが書かれており、寅楠の創業を支援していた同時期に、自身の身の振り方についても浜松を永住の地とするという大きな決断をしたことがわかる。

（『絵入東海新聞』明治20年7月9日付）

寅楠と地元有力者との関係は、終生変わることなく続き、60歳の時には、浜松市議会議員に当選し、初代副議長として地元貢献している。晩年、寅楠が福島を称えて子息たちを諭したという「男は男に惚れられなければ、事業に成功は出来ない」「自分にとって、その男の中の男こそは福島豊策先生だった」（大野木 1993 p.49）という言葉は、福島を通じて六代目中村藤吉（1854-1923 地元の資本家）^(注4)、林弥十郎（1845-1913 地元の運送業者）^(注5) をはじめとする多くの有力者の信頼を得て、大事業を興した寅楠ならではの言葉といえるだろう。

IV. 衛生啓蒙教育と非キリスト教的「サクセスストーリー」

福島豊策は自分の家屋敷を抵当に入れてまで寅楠を支援した恩人とされている（大野木 1965.7 p.32）が、そこまでしてオルガン作りに協力した理由はこれまで明確には説明されていなかった。前章で推定したように福島の方がキリスト教信者からの要望を受けて、教会用のオ

ルガン作りを主導していたとすれば、福島が最大の出資者になることは当然の成り行きともいえるが、それだけでなく福島にも彼なりの成算と目的があったようである。一つは明治19年4月に音楽（唱歌）が小学校の随意科目になり、全国の小学校への大量販売というスケールメリットが見込めるようになってきたことである。もう一つはオルガンを使った衛生啓蒙教育の試みで、それを推測できる印刷物が浜松市立中央図書館に保存されていることがわかった。

それは明治22年（1889）8月、福島豊策が「ヲルガン」製造人の山葉寅楠、遠江私立衛生会会長の岡部譲（1849-1937・賀茂真淵の末孫で、神職、歌人）との連名で町民に三千枚無料配付した「えいせいのうた」という一枚物のチラシである（末尾に掲載）。印刷は翻訳医学書『七科約説』を印刷した鞍智逸平（たかよし高義）（1844-1909）^(注6)の開明堂（浜松旅籠町）である。印刷されているのは衛生を呼びかける15番までの平仮名の歌詞だけだが、それに当時流行した「オッペケペー節」のような節をつけオルガンの伴奏で歌ったのではないだろうか。同様の歌は明治21年の「衛生かぞえうた」（大日本私立衛生会福井県武生支会配布）、明治33年の「衛生唱歌」（三島通良みちよし作詞、鈴木米次郎作曲）などがあり（『清潔の近代』pp.117-121）、音楽を使った衛生啓蒙教育は、繰り返し襲ってくるコレラやペストなど伝染病の大流行におびえていた明治時代には極めて現実的な意味があったと思われる。歌詞の内容を見ると大人向けの歌詞である。現在でも、子供向けには『手あらいのうた』『はみがきのうた』などの衛生向上をテーマにした歌があるが、当時は大人の衛生状況の改善が急務だったのであろう。また当時はラジオもレコードもない時代である。オルガンは単なる楽器ではなく、一種の「ニューメディア」でもあり、医師で衛生啓蒙家の福島はその国産化を寅楠に期待したのではないだろうか。

さらに、なぜ寅楠がオルガン作りを始めたのかという、最も重要な楽器作りの原点、動機についてはこれまで曖昧にされていた。例えば昭和4年（1929年）に、日本楽器が創業の経緯と現状をまとめた『日本楽器製造株式会社の現況』と寅楠を顕彰する『山葉寅楠翁』では、キリスト教徒の協力を得た教会用のオルガン作りという宗教絡みの話を避け、日本人に受け入れやすい小学校のオルガン修理という教育目的の話と外貨の流失阻止という経済的な理由のみが楽器作りの原点に据えられている。それに合わせて、寅楠個人の天才的閃きと超人的努力によって、わずか3、4ヶ月で全くのゼロから販売可能なオルガンを作り上げてしまうという、無理な状況設定を行ったため、感動的な「箱根越え伝説」などの超人的「サクセスストーリー」を創作せざるを得なくなったのであろう。

これに対して、小学校に比べれば少数だが、確実な需要があったキリスト教の教会関係について日本楽器の『社史』などが全く触れていないのは、オルガン作りで

山葉に先行し、キリスト教関係に強みを持っていた横浜の西川楽器を大正10年（1921）に日本楽器が買収し、日本楽器横浜工場としたことが関係していると思われる。日本楽器は西川楽器を吸収合併した後も、西川ブランドを残しているが、ブランドを教会用に特化させ、需要を確保しようとしたのであろう。つまり、山葉（ヤマハ）は教育楽器として、西川は宗教楽器として棲み分けが行われたのである。そのために山葉寅楠の出世物語からキリスト教的要素がいっさい排除され、小学校の故障したオルガン修理のことだけが熱心に語られるようになったのであろう。しかも山葉オルガン創業に関わった団体や人物の中から、敢えて浜松のキリスト教会やキリスト教徒である太田用成の名前を伏せ、小学校や医師の福島豊策、職人の河合喜三郎、地元資本家の中村藤吉ら非キリスト教徒の名前だけを残してストーリーの単純化が図られたのではないだろうか。

寅楠は日本楽器製造株式会社設立の前年、明治29年の「音楽雑誌」第58号に掲載された談話の中で「余は始め時計製造業なりしか風琴製造を企て、より此事に関して未だ一人の外人を雇わず又一回も外人の指揮教授を受けたる事なく独力独歩幾多の困難を経て漸く今日に至り稍々其基礎を固めたり」（同誌 p.3）と語り、外国人すなわち異教徒との関係を断ちながら国産楽器事業を発展させてきたことに自負を表明しているように、寅楠自身が「非キリスト教」（日本のキリスト教徒を含む）の方針をたて、その後の経営者にも引き継がれたと思われる。寅楠自身は日本の神仏習合の神である金毘羅権現を信仰していたとされ、士族出身の内務官僚であった2代目社長の天野千代丸はピアノの製造技術向上のためにドイツ人技師を招聘しているが、キリスト教とは特に縁がなく、3代目の川上嘉市は合理主義者で知られ、中学で英語を外国人宣教師から習った経験があり、夫人はクリスチャンだったが自身はキリスト教に対して一定の関心を持っていたものの、受洗することはなく一線を画していた。（『遠州産業文化史』『躍進の浜松』『川上嘉市自叙伝』などを参照）

その後、西川ブランドは、旧西川楽器の日本楽器横浜工場が工場再編のため昭和14年（1939）頃に閉鎖されたことによって消滅し、山葉オルガンの創業とキリスト教との関係についても、その後ほとんど再検討されることもなく、現在に至っている。

V. おわりに

以上、本稿では「山葉オルガン創業前史」におけるいくつかの疑問点のうち、県立浜松病院の院長だった福島豊策、太田用成らとの関係、キリスト教信者・教会との関係などを取り上げて検討してきた。その結果、山葉寅楠は山葉オルガン創業の恩人である福島豊策医師とは長崎滞時にすでに知り合っていた可能性があり、時計か

ら医療機器への転身には福島から医師として助言され、オルガン製造への転身は、衛生啓蒙家として音楽の効用に着目した福島によって主導されていた可能性があることがわかった。しかもオルガンの試作段階では福島の仲介により、浜松のキリスト教会と太田用成らキリスト教信者の協力があつた可能性があることもわかってきた。しかし、その一方で、明治中期の日本を取り巻く国際情勢の変容のためか、キリスト教と距離を置く姿勢も伺える。

ただ、キリスト教の宗教楽器であつたオルガンが教育用の楽器として注目され、オルガン作りが従来の手工業的産業から近代的工場生産による一大産業に変化する過程にはなお不明な点が多い。特に一地方都市で楽器生産を始めた寅楠が中央の「お墨付き」を得て発展するプロセスには不明なことが多い。最後にそのきっかけを作つた可能性のある人物としてⅢ-2でも紹介した静岡教会の平岩^{よしのす}恒保牧師をあけておきたい。

平岩は明治10年に東京師範学校に奉職しているが、伊澤修二が主管（所長）を兼務した体操伝習所の教師をも兼任し、両者は親しい関係にあり、伊澤の望んでいたオルガン国産化の必要性についてもよく理解していたと思われる。その後、平岩はメソジスト教会の静岡県担当部長として明治17年から約3年間、東京と静岡・浜松間を頻繁に往復しており、寅楠がオルガンの審査のために訪ねた東京音楽学校の伊澤修二校長への紹介者として適任だが、それを証明する資料や証言は今のところ見当たらない。

山葉オルガン創業前の山葉寅楠個人については残念ながら資料が乏しく、本稿においても多くの論点が推定に止まり、十分な論証ができなかった。また人物を語るのに不可欠な写真についても、山葉寅楠の写真はきわめて少なく、意識して探したが、後掲した数枚の肖像写真（肖像画）しか入手できなかった。これは同時代の著名な企業家の中では異例の少なさではないだろうか。これらの問題は一企業史としての位置づけに関わらず、明治の英学の到来という時代背景との関連の中で、人物史、郷土史、交通史、楽器産業史などの1ページとしても重要な事柄であり、山葉寅楠没後100年の節目（2016年8月8日）を契機とし、既存史料の再検討とともに、更なる史料、史実の発掘と検証が行われるよう期待したい。

(注1) 山葉寅楠^{やまはとらくす}（1851-1916）紀州徳川藩士山羽幸之助正孝の次男として江戸の紀州藩邸に生まれる（和歌山出生説もあり）。1868年、戊辰戦争・鳥羽伏見の戦いに参戦し、敗走。明治維新後、長崎で時計技術を、大阪で医療機械技術を学び、明治20年（1887）、浜松で楽器産業を興した。晩年、浜松市議会の初代副議長を一期務めた。山羽家の元祖は肥前鍋島家に仕えた荻六郎兵衛（?-1683）という武士で、1667年頃までに和歌山に移住し、紀州徳川藩に仕えた。

(注2) 福島豊策^{ほうさく}（1838-1903）肥前小城^{おぎ}（佐賀県小城市）に

生まれる。佐賀藩の医学校・好生館、長崎医学校で学び、山梨県立病院などを経て、明治12年浜松病院院長に着任。明治20年に個人医院を浜松で開業。山葉寅楠の創業を支援したほか、仏教系の教化団体・浜松信行社を創立した。寅楠が感謝を込めて福島に贈つたという明治23年（1890年）製の山葉オルガンが子孫に伝えられ、1991年国立歴史民俗博物館に寄贈された。（大野木 1993）

(注3) 太田用成（1844-1912、通称：ようせい）信州飯田（長野県飯田市）に生まれる。横浜でアメリカ人医師ヘボンについて医学と英語を学ぶ。明治6年飯田病院副院長に就任。明治7年浜松病院院長兼浜松医学校校長に就任。明治11年～12年、アメリカの医学全書を『七科約説』として翻訳出版。明治12年掛川病院院長に就任。飯田、豊橋を経て、明治20年再び浜松病院院長に就任。明治24年浜松病院が廃止され、個人医院を浜松で開業する。

(注4) 中村藤吉^{とうきち}（1854-1923）浜松田町の豪商・棒屋中村商店の6代目。報徳の教えを守って巨万の富を築き、浜松一の大富豪と言われた。山葉寅楠の日本楽器製造^株の設立を支援し、取締役^にに就任した。明治44年には山葉寅楠と共に、第1回浜松市議会議員に当選した。

(注5) 林弥十郎^{はやしやじゅうろう}（1845-1913）林運送店店主。内国通運（現・日本通運）の代理店として、静岡県西部の「東海道郵便馬車」「乗合馬車」事業を請け負い、楽器の輸送にも貢献し、日本楽器の取締役を務めた。林家の祖先は1574年に遠州灘に漂着した5人の中国人の一人で、名前を林五官^{りんごかん}といい、徳川家康の庇護を受け、朱印状を得て代々浜松で両替や運送業（飛脚問屋）、銅活字鑄造などを営んできたと伝えられている。五官は医学や薬学の心得があり、人々の治療を行い、信頼を得たという。またわが国で最初に銅活字を鑄造したとされ、家康が命じて復刻させた中国の古典『群書治要』全50巻（1616年）の印刷に要した銅活字約1万3千個を鑄造したと伝えられている。（林圭介 1980 p.84）（『浜松の史蹟 続編』1977 p.53）

(注6) 鞍智逸平^{くらちいつへい}（高義^{たかよし}）（1844-1909）明治6年頃創業の浜松の印刷会社「開明堂」の創業者。もとは代々役所の文書などを木版印刷する印版業者だったが、浜松県の印刷機械の払下げを受け、近代的な活版印刷業に転換した。開明堂の印刷したものには、医学翻訳書『七科約説』（1878-79）、『英語教授法集成』（1929）、『岳南史』（1931）などがあり、『広辞苑』の前身である『辞苑』（1935）の組版も行っている。開明堂は戦災で工場を焼失したが再建され、オフセット印刷部門を独立させた子会社の中部印刷^株も盛業中である。鞍智は報徳思想に基づく道徳教育に熱心で、明治27年に「奉公会」を組織し、機関誌『奉公』を発行した。逸平亡き後、事業を引き継いだ長男の鞍智芳章は大正8年社内に夜間定時制の「奉公実業補習学校」を開設し、東京高等師範学校を卒業した次男の中村修二らが旧制中学レベルの教育を行った。浜松市中区中沢町の^株開明堂の敷地内に中村修二の顕彰碑がある。

（敬称略）

主要参考文献（発行年順）

ヘンリー・ハーツホーン著 太田用成、虎岩武、柴田邵平
訳『七科約説』上下編 1878-79年
山田万作『岳陽名士伝』1891（WEB『国立国会図書館デジ
タルコレクション』で閲覧可）
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/777538> コマ番号 20、
37～40
西村左門編『静岡県人肖像録』柴合名会社 1907年
牧野輝智『現代発明家伝』帝国発明協会 1911年
成瀬麟、土屋周太郎編『大日本人物誌』八紘社 1913年
（WEB『国立国会図書館デジタルコレクション』で閲覧可）
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/933863>や之部 4 p コ
マ番号 657
東海実業報社編『静岡県知名人士肖像一覧』1914年
中尾栄次郎『静岡県紳士録』静岡栄一社 1916年
浜松市『浜松市史 全』1926年
静岡県『事蹟調査書』1924年（WEB『国立公文書館アーカ
イブ』で閲覧可）
[http://www.archives.go.jp/exhibition/digital/hat
sumei/contents/36.html](http://www.archives.go.jp/exhibition/digital/hatsumei/contents/36.html)
磯部千司編『山葉寅楠翁』『日本楽器製造株式会社の現況』
日本楽器製造(株)内 山葉寅楠翁銅像建設事務所 1929年
浜松師範学校附属小学校編『我等が郷土 6 山葉寅楠』附属
叢書（6）1935年
奈良繁太郎『日本発明家伝』帝国発明学会 1936年
日本楽器製造(株)編『山葉の繁り』1936年
山葉直吉翁建碑建設会編『山葉直吉翁建碑記念帖』1943年
小林郊人編『下伊那医業史』甲陽書房 1953年
川上嘉市『川上嘉市自叙伝』高風館 1953年
広岡治哉『内国通運会社と郵便馬車』(助運輸調査局 1953年
長崎大学医学部編『長崎医学百年史』1961年（WEB『長
崎大学学術研究成果リポジトリ』で閲覧可）
[http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/100-
69/6585/1/100_03_06.pdf](http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/100-69/6585/1/100_03_06.pdf)
日本通運株式会社編『社史 1962』1962年
御手洗清『遠州偉人伝』第一巻 浜松民報社 1962年
内田六郎『七科約説 附、浜松医学校』1969年
山本巴水『伝記小説 山葉寅楠』1972年
木俣正一編『開明堂 50周年記念誌』(株)開明堂 1972年
土屋重朗『静岡県の医史と医家伝』戸田書店 1973年
三木佐助『明治出版史話』ゆまに書房 1977年（原典『玉
淵叢話』1902年）
浜松史蹟調査顕彰会専門委員会編『浜松の史蹟 統編』
1977年
日本楽器製造株式会社編『社史』1977年
正木敬二『東海と伊那』1978年
林圭介『偲び草 林弥十郎伝』1978年（浜松市立中央図書
館所蔵）
土屋重朗『静岡県医療衛生史』吉見書店 1978年
伴 忠康『適塾をめぐる人々』(改訂新版) 創元社 1979年
檜山陸郎『洋琴 ピアノものがたり』芸術現代社 1986年
ヤマハ株式会社編『ヤマハ 100年史』1987年
山葉寅楠『山葉寅楠渡米日誌』大野木吉兵衛編 浜松史蹟
調査顕彰会 1988年

日本基督教団浜松教会編『浜松教会百年史』1991年
和歌浦を考える会編『和歌の浦 不老橋』1992年
日本通運浜松支店編『日通浜松 50年史』1992年
適塾記念会編『緒方洪庵と適塾』(改訂版) 1993年
武内孝夫『遠州地方の交通発達史』遠州鉄道株式会社 1993年
赤井励『オルガンの文化史』青弓社 1995年
西原稔『ピアノの誕生』講談社 1995年
松本雄二郎『明治の楽器製造者物語』西川虎吉 松本新吉』
創英社/三省堂書店 1997年
小野芳朗『清潔の近代』講談社 1997年
大野木吉兵衛『山葉寅楠の生涯』(講演録) 浜松市県居公
民館編 1998年
田中健次『電子楽器産業論』弘文堂 1998年
大橋ピアノ研究所編『人 技あればこそ、技 人あればこそ』
創英社/三省堂書店 2000年
前野孝則、岩野裕一『日本のピアノ 100年 ピアノづくりに
賭けた人々』草思社 2001年
学研編『図説・明治の群像』2003年
国立歴史民俗博物館編『紀州徳川家伝来楽器コレクション』
2004年
武石みどり『音楽教育の基礎』春秋社 2007年
日外アソシエーツ編『明治大正人物事典』2011年
村上紀史郎『音楽の殿様・徳川頼貞 —1500億円の
〈ノーブレス・オブリージュ〉』藤原書店 2012年
国立歴史民俗博物館編『楽器は語る —紀州徳川藩徳川治
宝と君子の楽—』2012年
三浦啓市『ヤマハ草創譜』按可社 2012年
和歌山県立文書館編『紀州家中系譜並に親類書書上げ(下)』
2012年
田中智晃『三木楽器史』『三木楽器資料集』大阪開誠館
2015年

論文、記事（発行年順）

東海社「福島豊策の謹告および仮開業予告」『絵入東海新聞』
1887年7月9日付第4面（静岡県明治新聞刊行会編
『絵入東海新聞』縮刷復刻版 上編 1972年刊に収録）
音楽雑誌社「山葉氏の楽器談」『音楽雑誌』58号 1896年5月
加茂喜一郎「浜松病院と七科約説」『静岡県郷土研究』15
輯 1941年7月
川上嘉市「山葉寅楠翁と楽器の製造」
『黎明期に於ける郷土の科学者』静岡県科学協会 1944年
小川常人「東海道の郵便馬車」『歴史地理』86巻4号
1957年1月
大野木吉兵衛「日本の技術者伝 3.山葉寅楠」『日本の科学
と技術』1965年7月
大野木吉兵衛「日本楽器製造株式会社と山葉寅楠の企業業
者活動」『浜松商科短期大学研究論文』9号 1966年
大石岩雄 大野木吉兵衛「経営継承問題の経営史的考察 —
日本楽器製造株式会社における事例研究 一」『経営会計
研究』9・10号 愛知大学経営会計研究所 1967年
大野木吉兵衛「地方産業史の一こま —浜松信行社の沿革—」
『浜松短期大学研究論文』14号 1972年
林圭介「東海道郵便馬車と沿道の馬車交通」『遠江』創刊号
社団法人 浜松史蹟調査顕彰会 1976年

大野木吉兵衛「浜松における洋楽器産業」『遠州産業文化史』
 社団法人 浜松史蹟調査顕彰会 1977年
 稲留藤次郎「太田用成先生を欣慕して」『遠江医学会会報』
 36号 1977年
 岩崎鐵志「浜松医学校と『七科約説』」『わが心の母校』ひ
 くまの出版 1979年
 林圭介「西遠の交通運輸事業と林弥十郎（上）（下）」『遠
 江』4号 1980年・5号 1981年
 川辺完仁「日本のピアノ 100年①」『ショパン』1992年5月
 伊東政好「日本最初の医学翻訳全書「七科約説」出版にた
 ずさわった人々」『遠江』15号 1992年
 大野木吉兵衛「由緒ある一オルガンの物語と日本楽器製造
 株式会社における技術者養成制度」『遠江』16号 1993年
 木下忠「山葉オルガン第一号をめぐる謎」『遠江』16号
 1993年
 木下忠「補遺・山葉オルガン第一号をめぐる謎」『遠江』
 18号 1995年
 木下忠「山葉・鳥居の風琴に関する新資料」『遠江』24号
 2001年
 武石みどり「山葉オルガンの創業に関する追加資料と考察」
 『遠江』27号 2004年

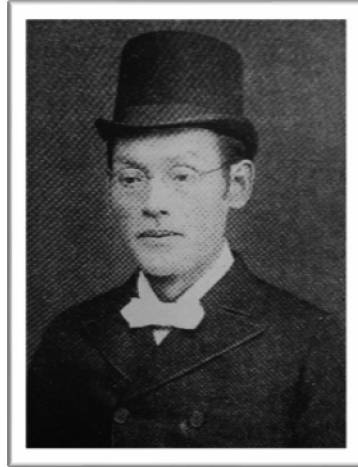
林圭介「浜松駅付近の明治時代の追憶」（一）・（二）
 『遠江』30号 2007年・31号 2008年
 田崎哲郎「浅井常三から矢澤梅太郎宛書簡等」『愛知大学
 総合郷土研究所紀要』53輯 2008年
 佐々木崇暉「豪商・豪農ネットワークと地域の産業化～地
 縁・血縁・報徳～」『遠江』36号 2013年
 小野澤 隆「遠江の英学—ある豪農の起業への影響」
 『英学史研究』46号 2013年
 田中智晃「河内屋佐助（三木佐助商店）の歴史とその投資
 行動」『東京経大会誌』286号 2015年
 小野澤 隆「ある印刷業者と学術文化 ～開明堂及び印刷物
 の周辺をめぐる」『常葉大学健康プロデュース学部雑誌』
 9巻1号 2015年
 小野澤 隆「米医 Henry Hartshorne と原著 A Conspectus
 of the Medical Sciences 論考 — 医学訳書『七科約説』
 をめぐって—」『英語学・英語教育研究』20 (34) 2015年
 小粥章司「浜松における楽器メーカー変遷の一事例 —山
 葉・タイガー楽器からローランドへの細道—」『遠江』
 39号 2016年



日本楽器製造(株)創立十周年記念
 祝賀会の記念写真(一九〇七年)
 金原健次郎氏(オルガン塗装)
 澤田柳吉先生
 小山作之助先生
 山葉亀五郎氏(共益商社出向)
 橋本吉五郎支配人・副社長
 福島鋭雄(福島豊策次男)
 伊澤修二先生
 内藤文六郎共益商社支配人
 河合喜三郎氏
 山葉寅楠夫人(のぶ子)
 富田久吉氏(オルガン社員)
 三木佐助氏(四代目)
 山葉寅楠社長
 松山大三郎オルガン部長
 白井練一共益商社社長
 河合小市アクシオン部長
 上原六四郎先生
 榊原熊次郎氏(総務部長)
 山葉直吉ピアノ部長
 静岡県の役人?
 不明
 榎本瞭之助木工部長
 (澤田勲男氏所蔵写真)



『岳陽名士伝』1891年刊



『音楽雑誌』58号1896年刊



1904年頃撮影 ヤマハ(株)提供



『静岡県人肖像録』1907年刊



下の集合写真の一部拡大



山葉寅楠翁銅像 1929年建立
『浜松市史 新編史料編4』
口絵54



1907年11月17日、日本楽器創立10周年記念祝賀会記念写真
寅楠の右はのぶ子夫人、右上は三木佐助、左上は白井鍊一
夫人の右は伊澤修二、寅楠の左は上原六四郎
『三木楽器史』P.39



1905年4月開催の第1回東洋輸出品共進会の集合写真より
(浜松市立中央図書館所蔵)



長崎医学校時代の
福島豊策
(右写真の拡大)



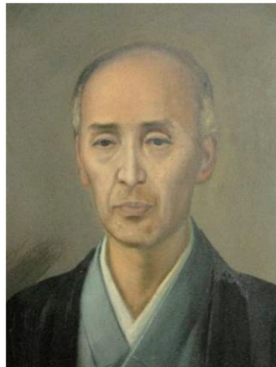
福島豊策 (後列右五)
長與専齋 (後列右二)
小石第二郎 (前列中央)
『緒方洪庵と適塾』1993年刊
(京都市・小石医院究理堂文庫所蔵)



福島豊策 (後列右五)
太田用成 (後列右一)
虎岩武 (後列右二)
長與専齋 (前列右三)
『静岡県医療衛生史』1978年刊



福島豊策
『岳陽名士伝』
1891年刊



福島豊策
(浜松信行社所蔵)



太田用成
『下伊那医業史』
1953年刊



太田用成
(太田家所蔵)



中村藤吉
『静岡県人肖像録』
1907年刊



中村藤吉
『静岡県知名人士肖像一覽』
1907年刊



鞍智逸平 (高義)
(鞍智家所蔵)
1903年撮影



林弥十郎
『偲び草 林弥十郎伝』

暑^{おんみま}さ御見舞い

衛生のうた

静岡県浜松 福島豊策^{ほうさく あらわ} 著す 岡部讓^{ゆずる けみ} 関す

- 一、身体髪膚^{はつぷ}を 父母に受け 養育の恩 教育の
深き恵^{こうむ}みを 被^{おの}りて 初めて己が 体ぞと
思う心も できるなり
- 二、昔^{むかし} 聖^{ひじり}の 教^{おの}えにも おのが体^{おの}を 傷^けつけず
痛^{いた}めぬをもて 孝^{けう}行^{ぎやう}の 始^{はじ}めなりとは 教^{おの}えたり
努^{ゆめゆめ}々^{ゆめ}忘^{わす}るる ことなかれ
- 三、ようやく父母の 手^てを離^{はな}れ 所^{ところ}を隔^へて 国^{くに}を去^さり
教^{おの}えの道^{みち}に つくときは 朝^あな夕^{ゆふ}なに 子^こを思^{おも}う
親^{おや}の心^{こころ}は いかならん
- 四、おのが体^{おの}の 勞^{いた}ずきも ものの数^{かず}とも 思^{おも}わずで
この身^みの上^{うへ}の まめなれと 衛^{ゑい}生^{せい}法^{ぽう}を 指^さし示^し
心^{こころ}尽^つくさぬ 親^{おや}ぞなき
- 五、若^{わか}きときには こと^{こと}にまた 戒^{いまし}むべきは 色^{いろ}にあり
親^{おや}の意^い見^{けん}も 友^{とも}達^{だち}の 諫^{いさ}めもよそに 聞^きくときは
あたら命^{いのち}を 縮^{ちぢ}むべし
- 六、酒^{さけ}食^{しょく}にふけり 枷^か鎖^さをうけ 譲^やり受^うけたる 財^{さい}産^{さん}も
名^な誉^よも体^{てい}も 傷^けつけて 親^{おや}や祖^そ先^{せん}の 名^な前^{まへ}まで
汚^{けが}す人^{ひと}こそ 哀^{あは}れなり
- 七、飲^の食物^{じよく}を 始^{はじ}めとし 寝^ね冷^{ひや}え夜^よ更^{さら}かし せぬように
夜^{よる}昼^{ひる}ともに 心^{こころ}せよ 夏^{なつ}季^きはこと^{こと}に 体^{てい}より
心^{こころ}までみな 倦^うむものぞ
- 八、食^{しょく}餌^じをこなす 胃^い液^{じやく}まで その 拵^{こしら}えの 嵩^{かさ}減^{げん}りて
六^む七^{しち}分^{ぶん}と なるなれば 食^{しょく}べる食^{しょく}餌^じも それにつれ
常^{じょう}より少^ひし 控^ひかゆべし
- 九、こと^{こと}に夏^{なつ}季^きは 住^すむ部^ぶ屋^やや 流^{なが}し元^{もと}また 水^{みづ}ための
掃^{はき}除^ぞをなしてきれいにし 腐^{くさ}れし水^{みづ}や 悪^あしき蚊^{ぶん}を
留^{とど}めぬように 気^きをつけよ

十、いと恐^{おそ}るべき「コレラ」でも その他^{やまい}の移^{うつ}り 病^{びょう}でも
体^{てい}の弱^{じやく}みと不^{ひま}潔^{けつ}との 暇^{ひま}をつけこみ 隙^{すき}をみて
侵^{おか}せるものと 知^しりぬべし

十一、また親^{おや}たちよ 親^{おや}たちよ 明^{めい}治^しの御^み世^よは 百^も千^ち歳^{とせ}
積^つりし迷^{まよ}いを 打^{うち}破^{やぶ}り 文^{ぶん}明^{めい}国^{こく}の 人^{ひと}びとと
勝^{かち}ちを争^{まが}う 時^{とき}なるぞ

十二、東^{あづま}の海^{うみ}の 野^の蛮^{ばん}なる 群^{ぐん}れを抜^ぬきんで 立^{たて}憲^{けん}の
大^{おほ}まつりごと 敷^{おほ}きたもう わが^{わが}大^{おほ}君^{きみ}の 御^み心^{こころ}を
露^{つゆ}聊^{いささ}かも 背^{そむ}くまじ

十三、無^む理^り死^しに泥^ぬむ 迷^{まよ}い事^{こと} 御^み籤^{まじ}呪^じい 巫^み女^こなどと
騒^{さわ}げる人^{ひと}は 文^{ぶん}明^{めい}の 道^{みち}理^りを知らぬ 恥^ちさらし
わが^{わが}大^{おほ}君^{きみ}の 罪^{つみ}人^{びと}ぞ

十四、されば例^{れい}えに言^いう通^{とお}り 蒔^まかざる種^{たね}は生^なえぬなり
肥^こしなればいかほどに 種^{たね}を選^おびて下^{くだ}ろすとも
生^なえぬことこそ 道^{みち}理^りなれ

十五、老^{おい}いも若^{わか}きも おしなべて 衛^{ゑい}生^{せい}法^{ぽう}を 良^よく守^{まも}り
いと健^{すこ}やけき 身^みとなりて 君^{きみ}には忠^{ちゆう}義^ぎ 親^{おや}に孝^{かう}
優^うれし人^{ひと}と なれよがし

明治廿二年八月十四日 印刷

〃 〃年〃月十五日 出版

発行者 静岡県敷知郡浜松鍛冶町六十五番地 福島豊策

同県同郡浜松八幡地「ラルガン」製造人山葉寅楠

印刷者 同県同郡 浜松旅籠町五十番地 鞍智逸平

売り物に非ず 三千枚施し

校閲者の岡部讓（1849-1937）は国学者賀茂真淵の末孫で、神職、歌人。遠江私立衛生会会長、敷知郡浅場村村長などを歴任。岡部家は江戸時代伊場村の独礼庄屋
印刷者の鞍智逸平(本名：鞍智高義 1844-1909)は医学書『七科約説』を印刷した開明堂（明治6年頃創業）の創業者。旧仮名遣いの原文を新仮名遣い、漢字かな交じりに改めた。原文は漢数字と「」内の片仮名以外全て平仮名
紙の寸法：たて25.7cm×よこ19.4cm 1枚
出典：浜松市立中央図書館郷土資料室所蔵
「内田旭資料 老松園」パンフレット155